特集 残したい記憶

自宅の庭で兄二人と、17歳の敦子さん。

『少年特攻震洋顛末記』より、田中袈裟翁さん。

昭和のはじまりは1926年、もうすぐ100年です。この激動の時代を生き抜いた『ぐ～す～』読者の皆さんの胸の中の記憶を、今こそ聞いて、伝えて、残したい…そんな思いで特集「残したい記憶」をお届けします。各地の販売パートナーさんの協力のもと、5人の皆さんをリモート取材※。あふれ出るように語られた幼い頃の暮らしぶりや戦争にまつわる思い出を中心に、編集部へ届いたお便りも囲み記事で紹介しています。

※リモート取材
LINE（ライン）やZOOM（ズーム）と呼ばれるインターネットの機能を使って、パソコンやスマートフォンの画面で顔を合わせながらインタビューする取材方法。

笠井淳子さん、
生後3カ月、母に抱かれて。

戦争「愚かなだった」

長野県松本市 田中袈裟翁さん | 95歳

昭和3(1928)年9月18日生

たなか・けさお
「話したいことがたくさんある…」思い出話はとめどなくあふれ出た。

「どうしても話さなければならないことがある」と言って、田中袈裟翁さんが語り始めたのは、やはり戦争の記憶でした。

桜に錨（いかり）の7つボタンに憧れ、15歳で海軍飛行予科練に志願。「兵隊に行けば死ぬのは当たり前だったんです。国に捧げた命、命を惜しむな。そう教育されてきましたからね」。

飛行兵を目指した少年に「新兵器」として与えられたのは「震洋（しんよう）」という小型の特攻ボートでした。「空を飛ぶと思ったら、ベニヤでできたオモチャのようなボートですよ。250キロの爆弾を積み込んで敵艦に突入するんです」。

昭和20年3月、田中さんたちを乗せた輸送船は、長崎から沖縄に向かいました。途中、敵の魚雷で輸送船は沈没、「護衛艦に救助されたんだが、仲間の半分が死んでしまったね」。

憧れの制服に身を包んだ袈裟翁さん

つぶやき 食料の確保に親が苦労していたこと。着物などと交換で農家からわけてもらったこと。さつまいものつるを食べたこと。お弁当を盗られたこと。➡

➡教科書も上の学年からのお下り。消しゴムや鉛筆も手に入らなかったこと。大阪府 松田寮子（91）

田中袈裟翁さん（95歳）、英子さん（94歳）夫妻。長野県松本市の自宅にて

間もなく日本は敗戦。生き残った袈裟翁さんは30歳で英子さんとお見合い結婚し、生まれ故郷の松本市で今も仲睦まじく暮らしています。

戦争のことを語り継がねば…袈裟翁さんは地元の新聞にこんな一文を寄せています。「実に愚かな戦争であった。志願してまで加わった私は何と弁解したらよいか言葉に詰まる」。

田中さんにこんな質問をしてみました。「もし今戦争が起きて、17歳だったらどうしますか？」。すると「戦争は絶対にあってはならないこと」と前置きした上でこう答えました。「戦うでしょうね」。

敗戦から79年、昭和という時代を生き抜いた少年がそこにはいました。

取材協力／デリシア 販売パートナー 石井進さん

『少年特攻震洋顛末記』
田中袈裟翁さんら少年兵たちが巻き込まれた悲劇が克明に記録されている。

卵の殻をふりかけに

岡山県 キョンばあば（90）

戦中戦後の食糧事情の悪い中、成長期でしたので親は1800gで生まれた私を何とか育てようと苦労した様です。鶏を飼い卵の殻は小さくすり潰して粉にした物をいつもお弁当の御飯の上にかけてくれました。その頃のお弁当は梅干又は沢庵が普通でしたが…今まで話す事はありませんでしたが…90歳迄生きられた事、親に感謝です。

母の教え

長野県 中田勝子（80）

70年も前のこと。わたしは北アルプスの雄大な山々の麓に生まれ、裕福ではないが、明るくて肝っ玉の大きい、誰にでも親切な母に育てられました。

母は友達や行商に来る人、物乞いまで、お茶をいれたり、時には昼食を振る舞っていました。確か私が10歳の頃でした。物乞いのおバアさんが帰った後、私は「きたない」と言って箒（ほうき）でサッサと部屋を掃いたのです。突然母は私の箒を取りあげ、「情けない!! 困っている人をバカにするような子どもに育てたつもりはない!!」…と涙を流していました。あの時の涙が一生涯忘れられません。

八十路となった今、皆さんが優しくしてくれます。人には親切に、今自分のできる事をできる時に愛情をもって人々に接すること…母の教えを守ってきたからこそ、いろんな人に寄り添っていただき、支えていただき幸せです。

➡パパほやほやの彼にまず〝おめでとう〟…（うれしいネェー）福井県 エリーゼ（73）

とぼしかった配給制度

にしもと・ひろえ
お化粧もおしゃれも素敵な宏江さん

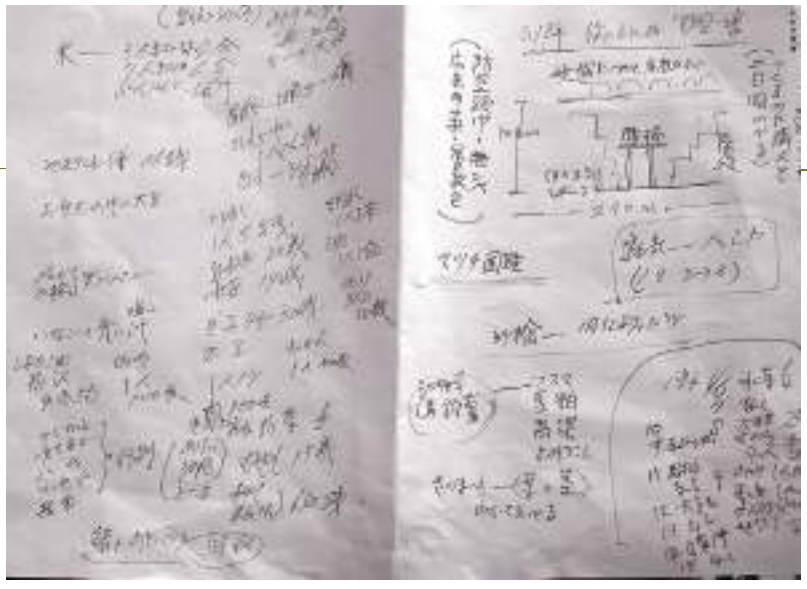
下／防空壕の詳しい見取り図を説明しながら「防空壕はひとつも役に立たなかった」とポツリ。

広島県東広島市
西本宏江さん | 93歳

昭和6（1931）年11月25日生

6人きょうだいの末っ子だった宏江さんは15歳まで京都で暮らし、戦後の昭和22年に父の地元広島へ家族で戻りました。広島で教師になり65歳で退職。その後は浄土真宗の奉仕活動で、デイサービスや特養で習字や俳句、表千家の茶道を教えています。

宏江さんが戦時中で一番おぼえているのは配給制度のこと。「母の日記によると、昭和19年1月6日水菜4分の1、7日配給なし、8日大根2本、9日味噌1人100匁、10日するめいか、11日なし、12日大根と卵1人1本と1個、13日なし、14日白菜1把、15日なし…」そんな状況でした。お米の配給は3人まで4合、7人まで6合、8人以上1升。「赤ん坊まで含めて8人いると1升貰えるのにと、母がうらやましがっていました」。また、ふすま（小麦の皮）を水で練った団子はまずくても食べられて有り難かった、イナゴ入りのお汁はおいしかった、甘い物が無いのでさつま芋が一番魅力だったそうです。



つぶやき「老いらくの恋」は男女ともに芽生えるし、年令差があっても「老い楽」で輝く時があっても良い。愛媛県 岡ちゃん（79）

つぶやき 毎週水曜日と土曜日に会えるとくし丸の○○○君に無事女の子が産まれて…➡

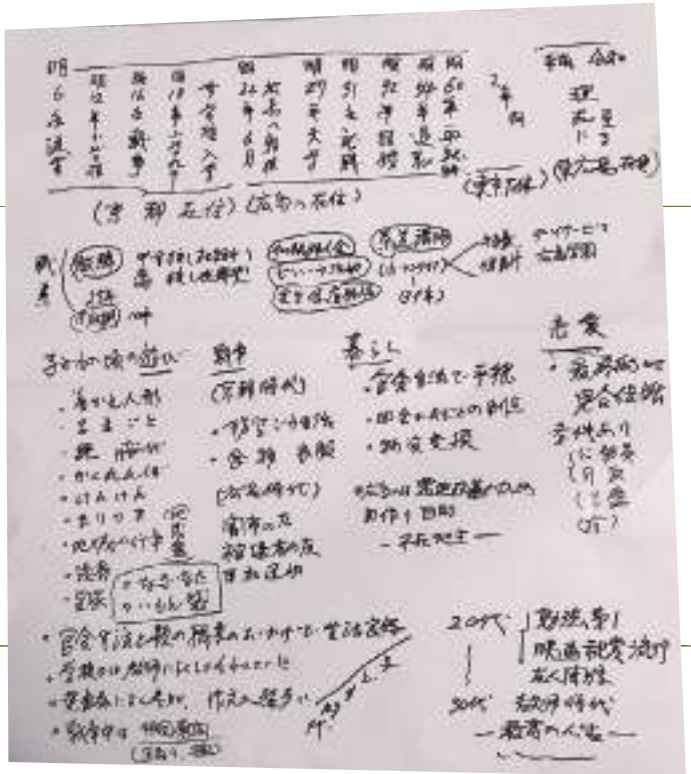
表千家の茶道の講師を、現在も続けています。

ひょろひょろでしたね」。

大きな模造紙に、昔の出来事を詳しくいっぱい書き出してくださった宏江さん。振り返ってみて「戦中戦後の生活は、良き思い出として残しておきたいなと思うんです」と言います。

「今の生活があまりにも幸せすぎるから、そう思うんでしょうか」。

取材協力／ショージ販売パートナー 国次一真さん



自分史年表を見ながら「昭和32年に結婚。最高です。振り返ってみれば」

「大根の配給は多いが魚は少なくて栄養不足でした」。とにかく食べ物が無いので献立には頭を悩ませたそうですが、それが案外、楽しみでもあったとも。「母が着物を持って田舎へお米と交換に行ったのですが、列車の中で警察に全部没収されたことが何回かありました。いつも空腹でした。子どもたちはみな痩せて、

捨てたい記憶

福井県 エリーゼ（73）

73年間生きていると、頭の中、心の中が満杯で、残したい記憶よりも捨てたい処分したい記憶のほうが…。

◆

そうですよね。お気持ち、よく分かります。でも、忘れたいイヤな記憶は、忘れようとすればするほど忘れられないものです。これは人間が持っている生き残りのための本能のようなものらしいです。同じ失敗を繰り返さないように。戦争や公害など捨てたくても捨てられない記憶、捨ててはいけない記憶が、昭和にはたくさんありそうですね。

➡銭湯絵を継承されるとしり本当に感動しました。頑張って下さいね。長野県 中ちゃん (88)

初恋の人も夫も思い出残して逝っちゃった

あつこ
16歳 高校2年生
（1949年）

徳島県海部郡 敦子さん | 91歳

昭和8（1933）年1月18日生

敦子さんが語ってくれたのは同級生の卓さんとの恋。

「私の家の前を通って遠回り登校したり、決まって数学の教科書を借りにくる…卓さんは私のこと好きなのかなって思ってました」。

高校卒業後、彼は東北大学に進学。帰省時には「近くの海岸の松原で海を眺めながら、とりとめのない話をする時間が楽しかったです。今では考えられないようなつたない恋ですが、当時はそんなもんでした」。

亡き夫と生きた人生、幸せでした。

忘れられない白装束

兵庫県 星の子（73）

私が小学校3、4年の頃だったか、学校の前に白装束でゲートルを巻いた、片足の膝から下が無い、傷痍（しょうい）軍人らしき人が四つん這いになり、頭を垂れてじっとしてたのを覚えています。その頭の前には、お金を入れてもらう為の入れ物がありました。残したいというより、忘れられない記憶です。

◆

昭和の記憶の中で、白装束をまとった傷痍軍人の姿は異彩を放っています。アコーディオンを弾いたり、ハーモニカを吹いたり…なぜか曲は『異国の丘』だったような。軍人だけでなく日本中が傷ついたのが、あの戦争でした。

つぶやき とにかく物価高で腹立たしい毎日を過ごしております。とくし丸に頑張ってもらいたい。いつも助かっています。茨城県 ペリカン（62）

つぶやき 銭湯が減少していると聞いているなかで、田中さんのような若い方が、日本の文化ともいえる➡

長兄の旧制中学入学を記念して撮った家族写真(1940年)

その後、大学院を経て研究室に残ることになった卓さん。仙台に来て結婚して欲しいと求められますが、大学で家を出た兄たちが故郷には戻らなかったことから、「父母を残して遠くには行けない」と、さよならの手紙を書きました。

「手紙を読んですぐに卓さんは仙台から戻り、私を訪ねてきてくれたのです。けれど間の悪いことに、その日私は高熱に伏せっていました。玄関に応対に出たのは父。私には縁談があったらしく、けんもほろろに追い返したそうです。徳島大学に籍を移してもいいからと伝えに来たと、ずっとあとになって卓さんの妹から聞きました。訪ねてきてくれたことも知らず、卓さんからの手紙も途絶え、私は縁談の相手と結婚しました」。

62歳のとき、新聞の小さな記事で彼の死を知り、「ずっと胸にしまっていた悲しみが静かに溶け出してくるかのようでした。でも、やさしかった夫と60年連れ添って幸せな人生でしたから、今は卓さんとの恋もよき思い出として話せます」。

穏やかな笑顔の敦子さんです。

取材／ぐ～す～月刊とくし丸編集部

恐い記憶、楽しい記憶

山形県　イズミ・ケイ（83）

先の戦争中、東の空からB29の戦闘機が編隊を組み飛んで来たこと。必死に物陰にかくれた事。とっても恐い思いをした。

当時各地で大がかりな花火大会を兄姉たちと見学に行った事。お正月近く12月28日に一家総出で「もちつき」をした事。小正月の行事で大雪の中「おさいとう焼き*」をした事。「耳開け*」のこと。幼いころの節目の行事がたくさんあり、今でも忘れられない記憶として心の奥深くに残っております。

*「おさいとう焼き」正月飾りなどを焼く行事。全国的には「どんど焼き」。

*「耳開け」大黒様に「良いことを聞かせて」と願う。山形の古い習わし。

マラリアに苦しむ父

茨城県　だっぺばあちゃん（84）

私が子どもの頃、戦地から帰国した父がマラリアに苦しむ姿が目に焼きついています。戦争は絶対にしてはならない。亡母の苦労のほどはいかばかりだったか…思い出したくない時代でした。

◆

世界で最も人の命を奪っているのは「蚊」だそうです。もしかしたら戦争よりも恐ろしい存在かも知れません。日本国内での感染は心配ないようですが、世界ではいまだに命を落とす人たちがいます。戦争もマラリアも、悲劇はまだ続いていることを忘れないようにしたいですね。

➡はいりたくなりました。北海道 森野猫コースケ（64）

かみがわら・さきこ
東京原宿で生まれ、満州に渡り、昭和20年に世田谷に戻ってきた咲子さん。

銀座で初デート

千葉県千葉市 上川原咲子さん｜83歳

昭和16（1941）年1月1日生

「大きくなったら何になるの？」と聞かれた幼い咲ちゃんは、こう答えていました。「お馬に乗って兵隊さんになる」。

上川原咲子さんは、4歳まで満州で暮らしていました。軍人だった父と4人の兄の影響か、「みんなから男の子みたいって言われてね」と懐かしそうに笑います。

咲子さんが大切に胸にしまうのは『夫との初デート』の記憶でした。東京オリンピックがあった昭和39年。23歳の時、叔母の紹介で出会ったのが5歳年上の上川原信一さんでした。

お見合い当日、叔父が車で銀座に連れて行ってくれました。日比谷で映画を見た後、「喫茶店に入ったらさ、私はコーヒーが好きだから『コーヒー』って言ったら、主人

5つ年上の信一さんと。叔母さんの紹介で、いいご縁にめぐり逢いました。

は『ジュース』って言うのよ。えー？　男のくせにジュース？　女性がコーヒーって言ったら、普通合わせるじゃない、カッコつけて…」。

夕方、日劇の前にあった釜めし屋さんへ。「すごい家庭的な状況になっちゃったのよね。私はいいとこ見せようと思って、ご飯をよそってあげたりしてさ」。

その後、家まで送ってもらったのは覚えていますが、夫と見た映画の内容は全く覚えていないという咲子さん。「それが主人との初めての出会いね。縁があって良かったなって。いい旦那さんだったって本当にそう思う」。

信一さんは、今年の2月17日、87歳で亡くなりました。「朗かで楽しい人だった。私が元気にしてないと喜ばないと思うから、いつまでもめそめそしないの」。

取材協力／リブレ京成
販売パートナー　土屋雅之さん

淳子さんは少女のように笑う 幸せな思い出があふれ出す

新潟県佐渡市

笠井淳子さん｜78歳

昭和21（1946）年6月17日生

かさい・じゅんこ
23歳、教師になりたての頃（1969年）

佐渡に生まれ育ち、大学進学で東京へ。その後、教師となり、会社員の夫と埼玉県で40年を過ごした笠井淳子さん。定年を機に佐渡の家へ戻り、今はボランティアや地域活動に勤しむ日々です。

淳子さんの残したい記憶は、幼い日の家族の風景と共にあります。「私は逆子で未熟児で生まれたの。母は、強く大きくなるようにと栄養価の高いやぎの乳を毎日1本買って私に飲ませたそうです。板敷の間に皆が集う食事の時間はほんとに楽しかった。冬には、部屋の真ん中の床板を外して、囲炉裏を囲むの。おじいさんが小舟を出して釣ってきたとれたての魚を、串に刺して炭火で炙って食べるんだけど、とびきりのおいしさでした」。

つぶやき　各地で活躍する人々がお客様と良い関係を保っている所がよいですね。長野県 斉藤逢子（81）

哲代おばあちゃん103才（今年104才）、すごい写真を見ても若い。心だけは自由と言う言葉すてき。これからも頑張ってほしい。➘

今もいきいきおしゃれな淳子さん

「おもちゃなんかないから、おはじきや自作のメンコで遊びました。山にあるおじいさんの畑に行くのも大好きでね、そこにはおいしいものがいっぱいあったの。特にいちごやいちじくの季節は嬉しかったです。ヒルに吸いつかれませんようにと恐る恐る田んぼに入り、見よう見まねで苗を植えてみたりしたものです。帰りには、かまどや五右衛門風呂の焚き付けにする小枝をカゴに背負って帰るんです」。

少女のように屈託のない笑顔の淳子さん、かまどで炊いたご飯のおこげが大好きだったこと、おじいさんとおばあさんの息ぴったりの餅つきのこと、集落の祭りでは強く請われて、おめかしして神輿の上で踊ったことなど、思い出が次々とあふれ出てきます。

「地域全体がやさしく、ほんとに楽しく幸せな子ども時代でした」。

取材協力／マルイ 販売パートナー
坂上正樹さん

夫と楽しんだ船旅、客船飛鳥にて

最後の写真

長崎県 官兵衛（86）

昭和18年8月3日撮影の写真です。兄が休暇で帰省した時、近所の写真屋さんを呼んで記念写真を撮りました。自分以外は一張羅を来ていますが、自分（真ん中の子ども）はそこらへんで遊んでいて、写りたくないというのを無理やり引っ張って来られて普段着のまま写ることになりました。

結局、兄にとっては最後の写真となりました。昭和20年4月28日、沖縄南方洋上で特攻隊の一員として出撃して戦死しました。

戦死した兄は白い衣に包まれて帰って来ました。骨箱の中には紙一枚でした。

◆

凛々しい若武者ですね。昭和18年と言うと戦況がどんどん悪くなった年でした。兄上のどこか寂しげな眼差しは、迫りくる運命を必死に受け入れようとする覚悟のようにも見えます。明日の命も知れぬ兄。遊び足りない官兵衛少年。束の間の平和をとらえた家族の肖像からは、そこはかとない哀しみが伝わって来るようです。

➡私なんか、まだまだはずかしいです。茨城県 まっちゃん（77）